

会 告

二〇一一年度史学研究会大会および総会は、予定どおり十一月二日(水)午後一時半より京都大学楽友会館会議・講演室にて開催されました。

公開講演は、藤井讓治、和田晴吾の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

信長の参内と政権構想

藤井 讓治氏

古墳の他界観

——横穴式石室の世界を中心に——

和田 晴吾氏

なお、大会と総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会において、二〇一一年度会務報告がなされました。

二〇一一年度

史学研究会大会講演要旨

信長の参内と政権構想

藤井 讓治

本日は、天皇に対面し三献の儀が執り行われる正式の参内に焦点をあて、室町幕府最後の将軍となる足利義昭、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康等の参内を検討し、その上で織田信長の政権構想のなかでの天皇の位置を考えてみようと思います。

室町将軍はもとより天下人となった信長・秀吉・家康たちは、いづれも禁裏に参内しているものごとく普通には思われ、私自身もそう思っていました。ところが、どうもそうではないようです。

足利義昭が征夷大將軍となった永祿一年(一五六八)から大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡した直後の慶長二〇年(一六一五)までの四七年間に、天皇に対面し三献の儀が執り行われた参内を示した一覧から、参内の回数は、義昭は五年間で三回、秀吉は一五年間で二〇回、家康は一六年間で一〇回、

秀忠は一〇年間で四回であることが確かめられます。しかし、信長の正式参内をそこには見出すことはできません。

この点を踏まえたうえで、義昭の参内を見ていきますと、参内は天皇の側から求められたものであり、また参内の費用は参内する義昭側が負担するものであり、その調達に義昭側が苦慮していたことが知られ、さらに参内を行わなくなった義昭を信長が「無沙汰」と責めています。

信長について述べる前に、秀吉と家康の参内をみますと、秀吉は、天正一三年(一五八五)三月一〇日に内大臣任官に際しての参内を皮切りに、年頭の礼を中心に少なくとも年一度は参内しています。また、三献の儀における相伴者の構成が、若宮・六宮・八条宮などから家康を初めとする清華成した武家へ、さらに秀頼を伴っての参内時には女院や女御が加わるなど変化がみられます。

秀吉が死去し関ヶ原の戦い以前である慶長四年八月一四日の家康の参内は、天皇が事実上、家康を天下人と扱ったものであり、慶長五年から慶長一〇年までの参内は毎年なされ、その後は後水尾天皇の即位年の慶

長一六年、大坂冬の陣後の慶長一十九年、夏の陣後の慶長二〇年と折をみての参内となつています。

こうした点を踏まえ、信長の参内について、東京大学史料編纂所が刊行している『大日本史料』とその稿本である「大日本史編年史料稿本」の網文を通覧すると、五件を拾い上げることができ、内一件は誤認です。さらに、『御湯殿上日記』や『言継卿記』をはじめとする当時の公家の日記、信長の一代記である『信長公記』などを繰りますと、「信長」が禁裏に向いた記事を全部で九件拾うことができます。

室町幕府倒壊以前には、永祿一二年一月一三日、同一三年三月一日、同年三月二十九日、同年四月一九日、元亀四年（一五七三）四月四日、同年七月二日と六度にわたつて信長は禁裏に向きますが、いずれも禁裏作事の見廻、上京焼き討ち後の見廻などで、天皇との対面や三献を伴ってはいません。

天下人となつた後の信長は、天正三年七月三日には誠仁親王主催の蹴鞠見物に禁裏に向き、天正五年閏七月一日に禁裏の普請中の築地塀を見回り、同年一月一八

日に東山での鷹野に先だつて着飾つた鷹野の出で立ちで禁裏に入りますが、いずれの折にも天皇との対面も三献の儀もありません。すなわち、信長は、一度の参内もしなかつたのです。

信長が正式に参内しなかつた理由を、信長の方に求めるか、天皇の方に求めるかはひとつの論点ですが、正親町天皇が、將軍義昭にしきりに参内を求め、また信長にさまざまな官への任官を繰り返し勧めたことなどからすれば、その理由は信長の側に求めるべきと思います。天皇への臣従が目に見える形で現れる正式の参内の場を信長は嫌つたのではないのでしょうか。

では、信長は、自らの政權構想のなかに天皇をどのように位置づけようとしたのでしょうか。永祿一二年の「大うすはらい」（キリストン禁令）の折に信長が宣教師に対し、「内裏も公方様も氣にするには及ばぬ、すべては子の権力の下にあり、予が述べることのみを行い、汝は欲するところにいるがよい」と、自らが天皇、將軍をも超える存在であると宣言しています。

また、天正三年には天台・真言両宗のあいだで絹衣着用をめぐる争論の処理が混乱

を極めたことを機に信長は、禁裏に「五人の奉行」を定め、一切の事柄を五人の奉行から信長に「直奏」するよう命じています。さらに比叡山焼き討ちの折焼失した日吉社の再興を命じた正親町天皇の諭旨を押さえ、再造を停止し、信長が「判形」をもって下知したものは朝廷の沙汰に及ばぬとも命じています。

さらに、宣教師が信長に天皇への拝謁に尽力を求めたとき、信長は、「予がいる処では、汝等は他人の寵を得る必要がない。何故なら予が國王であり、内裏（天皇）である」と語つたとルイス・フロイスの書いた年報には記されています。

こうした信長の言動からすれば、信長自身が、天皇の上位に自らを置いていた可能性も十分想定されるのではないのでしょうか。今後、こうした目録で信長の政權構想を探っていきたいと思つています。

古墳の他界観

——横穴式石室の世界を中心に——

和田晴吾

古墳の研究は、それが築かれた時代が古代国家形成過程の途上の時期ということもあって、政治史的研究が主流をなしてきた。しかし、古墳の思想的・宗教的意味を問わなければ片手落ちというほかはない。

古墳の発掘では、多くの遺物・遺構とともに、人びとの行為の様々な痕跡が発見されている。そこで、ここでは、古墳という場における人びとの行為をできるだけ具体的に復元し、遺物や遺構の機能や用法を解明し、行為の全体を貫くシナリオやその背景となった他界観を検討してみたい。最初に古墳時代前・中期の「櫛の時代」の他界観の話をし、それを踏まえた上で後期の「室の時代」に言及する。

まず、前・中期の竪穴式石櫛に割竹形木棺を納めた前方後円墳の築造過程を検討すると、古墳の埋葬施設は墳丘を築造後に後円部頂上の平坦面に墓壙を掘りこむ「墳丘先行型」で、葬送儀礼の折には人びとが

「登る墳丘」であるため、出入口（くびれ部・造出付近）が設けられていたことがわかる。また、石櫛の構築・棺の設置・遺体の納棺・副葬品の配置が一体的に行われたが、それは棺が、遺体を入れて「持ちこぶ棺」ではなく、現地に「据えつける棺」で、別に運んできた遺体を墓壙内で納める用法のものであったことによる。それゆえ重い石棺も生みだされた。しかも棺・櫛の機能は遺体を嚴重に密封することにあり（「閉ざされた棺」）、そこでは櫛内で死者が生前同様の生活を送るといふ観念はなかつた。

一方、墓壙の埋めもどし後には、葺石をし、埴輪を立てて墳丘は何にかに仕上げられた。まず、墳丘は石の山になった。埴輪では後円部頂上の家形埴輪群が中心となり、その周りに威儀具や武器・武具が配され、それらを取り囲むように円筒埴輪（器台）や朝顔形埴輪（器台と壺）が並べられた。家形埴輪群の近くでは埴輪樹立後に土器を用いた飲食物供献を中心とする儀礼も行われたが、後に食物は土製品となり、この儀礼が永遠のものであることを示すようになった。同様の家・土器・土製品の組合は造

出でもみられるようになる。そして、一連の儀礼が終了した後は、古墳からは人の気配がなくなる。私はこのように仕上げられた墳丘を「他界の擬えもの」（模造品）と推測する。

中国の春秋・戦国といった櫛が盛行した時代には「魂気は天に帰し、形魄は地に帰す」（『礼記』郊特性篇）と考えられていたが、この神仙思想的魂魄観が櫛とともに列島に伝来し、古墳では形魄である遺体を棺・櫛内に密封する一方で、魂気である死者の魂が赴くであろう他界を古墳の表面に表現したと考えるのである。奈良県栗山古墳の周濠から飾られた実物大の船が出土したが、これは『隋書』倭国伝の「葬に及んで屍を船上に置き陸地これを牽くにあるいは小壘を以てす」の船にあたる。当時は首長が死ぬとその魂は船に乗って他界へ赴くと観念されており、実際の葬送儀礼においては魂が他界へと旅立つ様子を現実の世界で再現すべく、遺体を実物大の飾られた船に乗せて牽引し、「他界の擬えもの」としての古墳へと誘ったのである。古墳の出入口近くの造出から出土することの多い船形埴輪は、この船が迷うことなく他界に確実

に着いた証なのであろう。

ところで、古墳の埋葬施設としては槨の後に室が発達する。畿内系と九州系の二者があり系譜も性格も大きく異なる。畿内系の石室は中期後葉頃をはじめ、後期に発達した。室内には密封型の「閉ざされた棺」である家形石棺が納められている場合が多く、この室内は死者に「閉ざされた室」で、前代の槨の性格を強く持っていた。

一方、中期初頭にはじまる九州系の石室は、密封型の棺をもたず、仕切石・石障・石屋形など屍床を基本とする施設のもの（A類）と、妻入り横口式家形石棺で後に直葬されて棺内が室のように利用されるもの（B類）とがあるが、いずれも室内は死者が自由に浮遊できる「開かれた室」であることに特徴がある。九州に特徴的な装飾古墳の石室である。

ところで、横穴式石室には戦前からイザナギノミコトの黄泉国訪問譚の舞台説がある。特定の空間に出入口のある家（なかに床）があり、すこし離れて石の扉や坂（ヨモツヒラサカ）などある。そしてイザナミノミコトはそこで生きた人のように暮らしており、家の内部には広がりがあるようで、

黄泉神・ヨモツシコメ・千五百黄泉軍などがある。このような舞台装置が整う石室は畿内系にはなく、九州系の石室こそが相応しい。

そこで、「開かれた棺」をもつ「開かれた室」の系譜を求めると、高句麗から中国北朝に源流を求めることができる。中国では槨の終末に槨内で死者が動きだし、秦・前漢に室が出現。ここでは死者は生前同様の生活を送るとされた。その流れは隋唐に及ぶが、その途中のある段階のものが列島に及んでいるものと思われる。

二〇一一年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇一一年度大会・総会は、一月二日（水）午後一時半から五時半まで、京都大学楽友会館会議・講演室において開催された。

総会では、夫馬進理事長による挨拶の後、上原真人氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務（吉井秀夫常務理事）からは、役員交代、今年度の例会実施について報告が

あり、来年度は四月二日（土曜日）に「災害」をテーマとして開催することが案内された。

編集（小山哲常務理事）からは、「史林」の刊行について報告があった。

会計（金澤周作常務理事）からは、二〇一一年度予算の紹介、科研費申請の準備についての報告があった。

広報（高嶋航常務理事）からは、ホームページの英語版の作成状況について報告があった。

これに引き続き、公開講演が行われた。講演は次の二本であった。

藤井 讓治氏

「信長の参内と政権構想」

和田 晴吾氏

「古墳の他界観——横穴式石室の世界を中心に——」

講演者紹介と司会は、それぞれ勝山清次理事と上原真人理事がつとめた。講演内容は本号に掲載されているので参照されたい。本年も盛況で、約一五〇名の参加者を得ることができた。

公開講演のち、井谷鋼造理事が閉会の辞を述べ、大会を終了した。